

令和 4 年 4 月 21 日現在

機関番号：22302

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12400

研究課題名（和文）古代語文末助詞の体系記述

研究課題名（英文）Description of Sentence Final Particles in Early Middle Japanese

研究代表者

富岡 宏太 (Tomioka, Kota)

群馬県立女子大学・文学部・講師

研究者番号：60802626

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：古代語の「詠嘆」「強意」「念押し」を表すとされる終助詞群「かな」「よ」「や」「かし」「な」について研究した。第一に、「や」には疑問の助詞の場合と詠嘆の終助詞の場合があるが、どのように両者を弁別できるのか、第二に、「や」「な」はどのような意味を表すのか、「な」の表す確認は、現代語「ね」の表す確認とどう違うのかなどを明らかにした。さらに、終助詞の体系的記述の第一歩として、「かな」「よ」「や」「かし」の関係性を、助動詞との承接の観点から明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

終助詞が表す意味は、発話の内容を話し手がどう捉えるかというものではなく、聞き手に向けられるものである。その終助詞の個別的な意味が鮮明になったことは、古典語研究において有用であるのみならず、古典作品の読解にも大きな意味を持つ。

また、終助詞の用法を現代語と古代語とで比較することにより、時代間のコミュニケーションのあり方の違いを考えることにもつながることになると考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this study, I revealed meaning of sentence final particles in Early Middle Japanese. Also, I revealed relationships of these particles.

研究分野：日本語学

キーワード：古典語 日本語史 終助詞

### 1. 研究開始当初の背景

古代語には、「詠嘆」「強意」「念押し」といった意味を持つとされる終助詞が非常に多い。にもかかわらず、それぞれの意味の違いは、十分に明らかにされているとはいいがたい状況であった。また、それぞれの助詞相互の関係についても不明確であった。申請者はこれまでの研究で、「かな」「よ」「や」などの一部の終助詞の用法記述を行なってきたが、それをさらに深化させ、また、体系的な研究に移るためのきっかけも必要な状態であった。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は2点ある。一つ目は、個別終助詞の意味記述の精緻化である。中でも特に、申請者がこれまで十分に扱ってることができなかつた、「や」「な」の意味・用法を記述することを目的とする。そして二つ目は、より体系的な記述を行なうことである。本研究期間においては特に、相補分布的な関係にある「かな」「よ」「や」「かし」が、終助詞全体の中でどのように位置づけられるのか、助詞相互の関係はどのようになっているのかを明らかにし、古代語文末助詞の体系を描き出すことを目的とする。

### 3. 研究の方法

1年目にこれらの終助詞についての簡易データを整備し、2年目、3年目はそれにもとづき、「や」「な」の意味記述の精密化を行なった。その際、最初から意味的な記述をしようとするが無理が生じるので、統語的な基準や、対人関係など、具体的なデータの積み重ねをもとに、それらを抽象化した形で記述するよう心掛けた。また、4年目には、体系的な観点から、過去に調査した終助詞も含め、「かな」「よ」「や」「かし」の関係を統語的な側面から明らかにすることとした。本研究期間では、まず、助動詞との承接関係から終助詞の分布に迫る方法を採用した。

### 4. 研究成果

簡易データ作成は着実に終了した。このデータは、古典本文のほか、いくつかの統語的な情報、現代語訳などを取り入れたものである。これにより、2年次以降の研究ばかりでなく、今後の研究が進みやすくなる素地も作ることができた。

次に、「や」を疑問の係助詞と詠嘆の終助詞に分ける方法を明らかにした(富岡宏太(2020b))。さらに、「や」の意味を場面や統語的な側面から明らかにした。「や」は様々なもちいられ方をするが、その中核にある意味は、臨場的な感情表出であるものと考えられる(富岡宏太(2021b))。

「な」についても明らかにした。「な」は従来、「聞き手への確認」を表すとされてきたが、実際には、話し手が自分自身の頭の中で確認する例も一定数見られることから、単に「確認」の意味を表すのだと考えられる(富岡宏太(2020a))。また、現代語との対照により、確認の終助詞が、古代語においては、現代語ほど使用されず、意志の文や命令の文末にも使用されていなかったことを明らかにした。これは、古代人と現代人との間で、言語コミュニケーションのあり方が異なるものであった可能性を示唆するものである(富岡宏太(2021a))。

最後に、体系記述については助動詞の承接からの調査が行えた。連体形接続の「かな」「よ」と、終止形接続の「や」「かし」との間には、過去の助動詞との承接割合にも差が見られる。また、連体形接続の「かな」と「よ」との間には、発話内容による使い分けが見られ、「や」「かし」の間には、助動詞が結果的に表す意味と終助詞の意味との相性による使い分けがある事も明らかになった(富岡宏太(2022))。

3年目のコロナ禍の影響により、肝心の体系的記述については、十分な成果が得られたとはいいがたい側面がある。体系的記述に関するもので、かつ、掲載済みの論文は、1件のみという結果に終わってしまった。

しかしながら、個別終助詞の意味記述の精緻化は、着実に進めることができた。これにより、今後、より一層の体系化を図った際に、それぞれの終助詞の分布が何を意味するのか、より深く考えていくことが可能になると思われる。

また、当初の計画で作成予定だった報告書が作れなかつた代わりに、新たに資料を購入し、簡易データに、『源氏物語』の他の訳者による現代語訳の情報を付与する作業も行なっている。

る。これが進んでいくことで、現代語と古代語との史的対照が、より客観的に行なえるようになるものと考えられ、今後の研究のことを考えても、意味のある作業となった。

富岡宏太（2020a）「中古和文の終助詞ナ」『国語研究』83号、國學院大學国語研究会

富岡宏太（2020b）「中古和文の文末助詞「や」—係助詞文末用法と終助詞—」『群馬県立女子大学国文学研究』第40号 群馬県立女子大学国語国文学会

富岡宏太（2021a）「確認の終助詞の歴史的対照—現代語の「ね」と中古和文の「な」—」野田尚史・小田勝編『日本語の歴史的対照文法』和泉書院

富岡宏太（2021b）「中古和文の終助詞・間投助詞「や」」『國學院雑誌』第122巻7号 國學院大學

富岡宏太（2022）「中古和文の「詠嘆・強意」の終助詞と助動詞の承接」『国語研究』第85号 國學院大學国語研究会

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 富岡宏太	4. 巻 -
2. 論文標題 「確認の終助詞の歴史的対照 現代語の「ね」と中古和文の「な」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 野田尚史・小田勝編『日本語の歴史的対照文法』和泉書院	6. 最初と最後の頁 221 - 240
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富岡宏太	4. 巻 122巻7号
2. 論文標題 「中古和文の終助詞・間投助詞「や」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 59-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富岡宏太	4. 巻 85
2. 論文標題 「中古和文の「詠嘆・強意」の終助詞と助動詞の承接」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『国語研究』	6. 最初と最後の頁 47-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富岡宏太	4. 巻 83
2. 論文標題 中古和文の終助詞ナ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語研究	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富岡宏太	4. 巻 40
2. 論文標題 中古和文の文末助詞「や」 係助詞文末用法と終助詞	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 群馬県立女子大学国文学研究	6. 最初と最後の頁 173-184
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 富岡宏太
2. 発表標題 確認系終助詞の現古対照
3. 学会等名 令和元年度群馬県立女子大学国語国文学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 富岡宏太
2. 発表標題 中古和文の終助詞ナ
3. 学会等名 國學院大學国語研究会令和元年度前期大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------